

柴田宵曲

漱石覺え書補篇

漱石覚え書補篇

漱石の参禅に就いて

漱石の文章には全体的に禅味があると言われている。又そうでなくても小説の材料として屢々禅に関することや禅語が用いられているのが見当る。例えば「吾輩は猫である」の中にも碁をうつところに無弦の素琴を弾じているし、「虞美人草」にも大灯国師が一椀ずつの米を托鉢して歩き、遂に大寺院を建築したことが書いてある。更に亦「門」の主人公は、最後に鎌倉へ行って参禅して

いるので、この作者は禅に経験があるのではないかということは、読者の誰でもが考えるところである。

併し従来漱石の禅の経験を直接に端的に述べたものは、その材料が頗る乏しいので、漱石に果して参禅の経験があつたかどうかは一般には大いに疑問とせられていたが、最近偶々明治四十三年四月発行の小川煙村、倉光空喝共編の「名士禅」中の漱石の一文「色気を去れよ」を読むに至り、卒然としてその疑問は氷解した。それによると、漱石は確かに明治二十六年の春、鎌倉の円覚寺に出かけて参禅しているのである。この事實は漱石研究

家にとつても、また漱石の読者にとつても、頗る興味ある事実と思うので、次にその一文を紹介することにする。

(前略) 私は禅の事を尋ねられたつて真実ほんとに知らん、況して禅と文学との関係なんぞ、併し明治二十六年の猫も軒端に恋する春頃であつた、私も色気が出て態々相州鎌倉の円覚寺迄出掛けた事があるよ。

マア私の浮気話を聞いてくれ給へ、お寺に着いた時刻は恰度昼少し過ぎ、奥まつた一室を通つて、宗演さんに面会した時に、不図可笑しくなつて大に吹き出した。だつ

て昨今なら知らず、其当時の宗演さんはまだ年も若いのに老師々々といふのだから、禅坊主といふ者は随分矛盾したことを平気で喋舌る者だと感心した。面会が終ると別室に案内される、当分の間此所に起臥して大に修行する積りである。如何なる機縁か、典座寮の宗活といふ僧と仲好しになつて、老婆親切に色々教へて貰つた。さあ明日から接心と云つて一週間は精神を抖擻し、万事を抛つて座禅工夫に従はねばならぬ、其戦の門出に武者慄ひがつひ出る。

其夜、宗活さんが遊びに来て、面白いものを聞かしてく

れた。白隠和尚の「大道ちよぼくれ」で、大に振つてゐる。宗活さんは口を尖らしている。

帰命頂礼、みなさんきゝねえ、人々御所持の心と云ふやつは、是れぞと申してしつかと致した、目鼻も手足もござらぬながらも、扱てく自由なわるめでおりやるよ、云ふに及ばぬことゝは思へど、千年万年此の世に暮すと、思てござるがうかくするまに、やんがておみやれ無常の使が、迎ひにござると節氣じやあるまい、うろたへまはつて、忙しさうだよ、連られ行くのをまんざら見ながら、銭金持たねば人

ではござらぬなんぞと心得錯り、欲徳ばつかりを頭の皿から、かゞとのはて迄、立つにも居るにちつとも忘れず、偶々難レ得人間世界へ、来たこそ幸ひ其の上あまたの、貴き聖の尊みたまひし、五倫五常の大きな道筋、善悪邪正もあまさずもらさず、説き演べ玉うと置れしことなりや、貴きことだよ、昔々のずっと昔の、まだしも此の世の出来ないさきから、今年今月即今今日、数へも及ばぬ年を経たれど、ちよつとも減らず、そつとも増つさず、末世になるほど神や仏は、弥々たうとくかつかういや増し、威光

もいや増し、思へばぐどうでもきやつらは、親玉かぶぢやよ、若しやれ皆様、悪事正根のしつばうずだぎり、神や仏のちよろく、寵愛し玉ふ、正直正路の結構な悟を、ちつともなりとも、そつともなり共、求める心ができれば幸ひ、相応に励んで出精めされよ、おみさん方のおしやいますことには、悪事と申して外ではあるまい、人をば殺さず火付けや盗みは、元より為まいし何か因果で、死ぬと地獄の青鬼赤鬼、斑鬼のと根もなき虚言、聞く耳塞いで白木の凡夫が、無事是貴人と御飯の三杯、喰べるに任して鸚鵡や

猩々の、しやべくるやうだが、微細の様子は、夢にも見ないで理窟と我で、ふす口先ばつかり、本に誠に道理はしらない、たとへはしつても行ひ悪しけりや、何んにもならねい、薬を吞まざる病人わらには、扁鵲耆婆等も匙なげ捨てつゝ、天窓を攪いたる様なるもんだよ、夫故仏も縁なき衆生は、濟度は仕られぬ、阿闍提だのなんかんのとて、くどくもくもとく説演べ玉ひて置れしことぢやぞ、阿闍提とはどうした人だよ、どの様な人だよ、問はるゝやからへ答へて申さば、あせんだいとは外にはござらぬ、問

はるゝ此方が阿闍のきつほん、茲等の大事は十代伝はる、黄金の釜より秘蔵な事だに、容易く心得あゝでのこうでの、すじつたもじつたなんぞと理窟で、やつても大事に臨んで何にもならない、大事と申して外でもござらぬ、前にも所謂冥途の方より、便が来た時理窟で行くなら、どう共こう共云つてなおみやれ、其の場に臨んで四の五も云はせず、時刻が移ると閻魔の目玉の、庇がつんでるなんぞとぬかして、引立て行くぞや、皆様せつないことだよ、一から十迄あがきにあがいて、うろたへまはつて現世がこう

では、未来も大方ろくでは有るまい、神や仏はやれ
く不便や、何とぞ助けてやりたい者ぢやと涙を流
していたはり玉へど、自業の罪過はどうでも遁れぬ、
かうじやによつて皆さん必ず、油断をめさるな魚の
中でも、鯉といふやつは理口なやつめで、ありや
くよいやなどつこいさと滝津瀬登りて龍ともなる
げな、狐も稻荷の鳥居をひよつくらひよつと、飛び
こえ神にもなるげな、鳩めはグウぐく愚痴なるなが
らも、三枝の礼をば見事に勤める、雀はチユくく、
忠義の一道、鴉はカアくく反哺の孝行、夜昼鳴けど

も耳にも止めず、明ても暮てもはあスウくく云ふこと計が人でも有るまい、立つにも居るにもひよこくひよこつく、事計が人ではないぞと、魚めや鳥にも劣ると云はれや、一分立つまい、本に誠に立たずと思へば、本へ還つて孝悌忠信行ひめされて人とおなりやれ、本に皆様神に成るにも、仏に成るにも、人からならねば成り様がござらぬ、本に誠にめんどな事なり、以の字も呂の字も知らない祖父様も、恵の字と寿の字も分からぬ婆さまも、南無からたんのう如是我聞、一字の阿闍陀交りの長物語は必ずよし

なよ、夫れより平日たやすく慈悲心正直堪忍、三つをたもつて息入る息、無理せぬ様にと工夫をめされよ、しかつめらしくも手に取めさるゝ、念珠は百人出る息入る息、珠数くりめさると根本があつぱれ、阿弥陀の正体なるぞや、あんまり近くてあきれたことだと、困つたことには、人々御所持の心といふやつは、おてゝこてんより替るが早いぞ、正直正路の貴人に向つちや、慇懃丁寧なしやツ顔なしたり、御主や親には不情なつらつき、女房や子供にや鼻毛をのばして、外目もあんまり阿房の様だよ、金借る朝

にや地蔵に化けたり、請る夕にや閻魔もはだしで飛ぶ様なつらつき、瞬きするまに人事云ふやら、焼もちやくやらいや早やをへない事だよ、扱て又雨風雷電なんどは、天の制度の事とは申せど、分てもく恐れおのゝき、謹むべけれど然るを己が、勝手に悪るけりや却て罵り、恐りを起して呵したり罵つたり、おへない天気だどうぢやこうぢやと、恐れ多くも月日を指さし、其に向つて小便たれたり、なにからなにまで天地に背いて、大胆ばかり自分の意見で、曰ふより外には教の道とてなんにもないぞや、なんだ

かくおそろしそうだよ、おらゝはどうしやうオ、
イク。

宗活さんは剽軽な坊さんだと思つた。

頓て此剽軽な和尚も傍にゐた他の和尚も歸つて了つて、
私一人ぼつちに残され、禪寺の枯れた匂ひが身を圧して、
雪舟の書いた達磨が大眼玉をむいて来さうに思はれる。

スツポリ坊主臭い煎餅蒲団を頭から被つて、鎌倉は頼朝
時代、北条時代もない夢の国へと辿つた。

「夏目さんかいじやう開静ですよ」

不図眼を覚すと宗活さんに揺り起されてゐた。時計を見

るとまだ午前二時の未明、ゴオーンと大鐘が鳴る、ワイ
く読経の音がする、次いで鳴り響く喚鐘の相凶に私等
は隠禅に行つた。居士禅子ぜんこ（禅子とは禅をやる女）雲水
などウヨくゝゐる。夫れが代るくゝ喚鐘を敲いては宗演
老師の前に行つて見解を呈し、後ち老師の垂戒がすむと
鈴が鳴る。次から次へと入室して愈々私の順番となつた。
同じ様に喚鐘を敲いて老師の前に出ると、宗演さんは莞
爾笑つて簡単な禅の心得を語り終つて、慥か趙州の無字
を公案として授かつた。居室に帰り一向專念無？無？
無？

其中暮方になり禅堂へ行くと、ずらりと坊主が坐つてゐる。見渡したところ何れもこれも女の惚れさうなのは一人もない。私も其仲間に入つて坐ると、何となく変な氣持がして吹き出したくなるから大に閉口した。

斯て再び参禅が始る。私の順番になつて未明に授つた公案について見解を述べる、言下に退けられて了ふ。今度は哲学式の理窟をいふと尚更駄目だと取合はぬ、禅坊主程駄々ツ子はあるまいとほとく感じた。

斯様にして趙州の無字が荷厄介となつて、仲々宗演さんは受取つてくれぬ。或日宗演さんは竈の下を焚きつけて

みながら手に一冊の本を持つて読んでみた。

「何といふ本ですか？」

「碧巖集。けれど本は余り読むものぢやありません、幾等読んだつて自分の修行程度しか判らぬから」

此一句は実に大切な事である。

平常の修行さへ十分にやると、如何なる人物にもなれる。色氣づいて態々鎌倉迄来たのは抑々私の心掛け違ひだつたかも知れぬ。文学でも人をして感服させる様なものを書かうとするには、先づ色氣を去らなければならぬ。色氣ばかりが沢山で、肝腎の実意が乏しくては、ぶまな作

品が出来るといふものだ。実意あればこそ惚れる世の中
だもの。

天然居士米山保三郎

「吾輩は猫である」の中に故人として噂に上る曾呂崎という人がある。苦沙弥先生によって「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」という墓碑銘を撰まれるのが此の曾呂崎で、曾呂崎とは米山保三郎氏の事であろう。本当の戒名は何とこのか知らぬが、天然居士で通用するらしく、漱石氏は後年「空間を研究せる天然居士の肖像に題す」として、「空に消ゆる鐸の響や春の塔」という句を詠んでいる。

高等学校時代の漱石氏が建築家になるといふ志望であつたのを、セント・ポールズの様な家は我国にははやらない、下らぬ家を建てるより文学者になれ、と云つたのは米山氏であつた。漱石氏は晩年に之を追懐して、二人比べると自分が如何にも小ぼけなように思われたので、直に建築家志望を思い止つたと云っている。米山氏は円覚寺に洪川和尚に参じて居り、漱石氏の手紙にも「米山法師」ということが見えて居るがこの一喝はそれ以前に属するものらしい。但「門」の中に出て来るような漱石氏の参禅は、「米山法師」の影響ではあるまいかと思わ

れる。

漱石氏に与えたほど大きな影響では無かったが、子規居士も米山氏には驚かされた記載が残っている。単に同級生として「氏の長所は数学のみ、其他は真に子供のみ」と考えていた子規居士は、一日これと談じてその已に哲学書を読めるを知り、少からず驚かされた。特に居士を驚かしたのは、そういう高尚超越の事を談ずる米山氏が、自分より二歳も年少なことであった。早熟夙成の点にかけて復に儕輩に抽でた子規居士が、斯く驚かされたという一事のみを以てしても、その風采は想像に堪えたるも

のがある。

米山氏は加賀の人、大愚山人と号したらしい。「吾輩は猫である」は曾呂崎なる人物に就て、これという程の噂も伝えて居らぬが、八木独仙なる哲学者あつて、鼠に鼻の頭を齧られるの一条は、どうやら米山氏の逸話を取入れたものゝ如くである。漱石氏は此事を何も云つて居らぬが、子規居士晩年の書翰に「米山の鼻の頭を如何なる鼠がかぢり候やらん小生も時々思ひ出してはをかしく候」とあるのが手懸りになるかと思われる。もう少しこじつければ、八木というのも米の字の因があるかも知れ

ぬ。

明治二十三年高等学校卒業の際、漱石氏は試験の結果を子規居士に報じて「先生及第乃公及第山川落第赤沼落第米山未定」と云った。未定の内容はわからぬが、及落の外に超然たるところが、如何にも大愚山人らしくって面白い。米山氏が亡くなった時漱石氏は熊本にいて「米山の不幸返すくゝ気の毒の至に存候文科の一英才を失ひ候事痛恨の極に御座候同人如きは文科大学あつてより文科大学閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候蟄龍未だ雲雨を起さずして逝く碌々の徒或は以て轍鮒に比せ

ん、残念」と歎息した。文科大学は帝国大学文学部と名を換えたが、愈々出でてこの程の天才的人物とは縁の無い所になりつゝある。

哲学者米山保三郎氏は世の中に殆ど何も残さずして逝いた。大愚山人無くんば文学者漱石は世に生れず、などという月並的な筆法は弄したくない。夙成の人必ずしも大成を期すべからずとすれば、雪嶺博士の口吻に倣って、姑く「不成長の哲学者」と呼んでもよかろう。自ら伝えず、所謂業績の見るべきもの無しに、今猶その名を存するの、何等か真に伝うべきものがあるからではないか。

——我等は「漱石の写真帳」を開いて此の若き哲学者の面影を見る毎にいつもそういうことを考える。

日本文学電子図書館

漱石覚え書補篇

著 者：柴田宵曲

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石覚え書

中公文庫、中央公論新社

2009年9月25日 初版発行

日本電子文学図書館